

# ファッション誌を「読む」

## 〈VOGUE〉を巡る 人びととアメリカ文化

古賀令子 Koga Reiko



Richard Avedon 撮影とされる『Harper's Bazaar』編集長時代の Carmel Snow  
Caroline Seebohm 『THE MAN WHO WAS VOGUE』(1982, Viking Adult) より。

独身時代の Carmel White (結婚後 Snow)  
(左)、Edna Woolman Chase (右) と  
『VOGUE』の編集スタッフたち。  
1922年 Chase 『Always in VOGUE』  
(1954, Doubleday) より。

『VOGUE』1950年1月号表紙。  
Irving Pennの撮影によるパリ・オートクチュールのエレガンス。アート・ディレクションは Liberman。



### 第4回 女性編集者の系譜

Turnure時代の初代編集長 Josephine Redding から現在の Anna Wintour まで、『VOGUE』の編集長は女性が務めてきた。今回は、前回取り上げた Edna Woolman Chase 以降、現在の Wintour につながっていく編集者たちを取り上げてみたい。

#### ● 『Harper's Bazaar』に引き抜かれた Carmel Snow

Chase が、後任にと期待した Carmel Snow (1887-1961) は、アイルランド移民で、『New York Times』紙で記者をしていたが、1922年に『VOGUE』に移籍した。Chaseのもとでアシスタントとして働き、数年後、ファッション・エディターに昇格し、1929年からは、アメリカ版の編集責任者となるが、1932年に『Harper's Bazaar』(以下『Bazaar』)に引き抜かれる。

大衆的な女性誌だった『Bazaar』は、Snow と、Snow がアート・ディレクターに起用した Alexey Brodovitch によって変貌を遂げる。Snow はまた、後に『VOGUE』の編集長となる Diana Vreeland を「発見」してファッション・エディターとし、アーティストの Man Ray や報道カメラマンだった Martin Munkacsy、Brodovitch の “Design Laboratory” で写真を学んでいた Richard Avedon から多くの個性あるフォトグラファーを発掘しスタッフに起用して、1940～50年代に『Bazaar』の黄金期を築き上げた。以後『Bazaar』は『VOGUE』の最大のライバル誌となる。ちなみに、Christian Dior のデビュー作は “New Look” という名で広く世界に報じられたが、コレクションで一連の作品を目にした Snow がこう評したことからこの名で知られるようになったという「伝説」がある。しかし、Snow は、このフレーズを自身の『Bazaar』では使って



見開き2ページを使い余白を生かした大胆な Brodovitch のページ構成  
写真は Avedon。『Harper's Bazaar』  
1950年10月号より。

Alexey Brodovitch (1898-1971)  
ロシア生まれの写真家でグラフィックデザイナー、アートディレクター。1930～50年代の『Harper's Bazaar』で活躍し、ファッション写真の興隆に貢献した。第二次世界大戦後のファッション写真は、Brodovitch のアートディレクションで始まったとも言われる。大胆に余白を使い、洗練されたデザインを行った。『Harper's Bazaar』を離れた後も、若手アーティストの育成に力を注ぎ、グラフィックや写真、イラストを教えていた彼の “Design Laboratory” は、Irving Penn や Richard Avedon といった才能を輩出した。

**Richard Avedon (1923-2004)**  
アメリカ合衆国の写真家。ファッション写真およびアート写真の分野で大きな成功を収めた。1944年から『Harper's Bazaar』で活躍するが、1966年に『VOGUE』に移籍する。



**Jessica Daves**  
『Always in VOGUE』より

**Alexander Liberman (1912-1999)** ロシア系アメリカ人のアート・ディレクター、写真家、美術家。第二次世界大戦前から戦後にかけて、アート・ディレクターとして活躍し、特に『VOGUE』における活躍は、ファッション写真の興隆に大きく寄与した。1962年以降は、Condé Nast出版のエディトリアル・ディレクターとして辣腕をふるった。  
**Irving Penn (1917-2009)** アメリカ合衆国の写真家。フィラデルフィアのインダストリアル・アート・ミュージアム・スクールで Alexey Brodovitch に師事。

いない。卓抜した編集者だった Snow は、パリ・ファッション文化への貢献が認められて Chase 同様にフランス政府からレジオン・ドヌール勲章を贈られ、1958年まで編集長を務めて、その地位は姪の Nancy White が継いだ。

## ● Jessica Daves と 1950 年代の『VOGUE』

Snow を失った Chase は、イギリス版とフランス版の『VOGUE』を統括するだけでなく、1930年代後半に Jessica Daves(編集長在任: 1952-63) が台頭するまでアメリカ版を直轄した。Daves は、マネージング・エディターとして運営を任せられ始め、1952年に Chase が引退すると、編集長を引き継ぐ。

後に編集長となる Grace Mirabella は 1950 年代初頭に『VOGUE』に入るが、当時「雑誌はちょうど転換期にあった。…編集者欄には良家の子女に交じって、ファッション界での台頭を目論む『どこの馬の骨ともわからない』名前が並ぶようになっていた。新しい『ワーキング・ガール』——そのころはまだ働く女性を『キャリア・ウーマン』と呼んでもはやす風潮はなかった——の参入は、上流人種で固められた『VOGUE』に、徐々に中産階級が浸透しはじめたことを意味している」と、自伝『In and Out of VOGUE』(1995、Doubleday、邦訳: 実川元子『ヴォーグで見たヴォーグ』文春文庫) で述懐している。Daves は、ジョージア州知事の娘ではあったが、こうした実務派編集者に属していたと思われる。『VOGUE』を真面目な雑誌として位置づけるために努力したが、歴代の華やかな編集長の中では少々野暮ったい人物で、背が低く太っていたらしい。ファッションナブルからほど遠く、さらにヴィジュアルな感性も欠如していた、と Mirabella は断じている。

ファッションに関しては、Bettina Wilson (1948 以降 Ballard 姓) らパリ駐在を経験してパリにネットワークをもつエディターがチーフを務め、後に『LIFE』誌ファッション・エディターとして名を馳せる Sally Kirkland ら多数のスタッフが名を連ねて、パリやイタリアのオートクチュールからアメリカの既製服までをカバーした。

ヴィジュアル面はアート・ディレクターの Alexander Liberman が管掌していた。Liberman の名はスタッフ・リストの中で Daves に次ぐ位置に記されている。Liberman は 1950 年代はじめに Irving Penn のモノクロ写真を表紙に採用するなど名作をつぎつぎに生み出し、ヴィジュアル面で『VOGUE』の一時代を築いた。

Daves には、別の強みがあった。幅広い教養があり、読み物の編集では優秀だったという。ファッションに関しても、「読者の役にたつ」雑誌を目指し、中産階級の女性たちにも手の届く服を、広告ではなく編集ページに取り上げるようになった。また、デザイナー名や取扱店名などのクレジットがファッション写真と同じページに掲載されるようになったのも Daves の功績とされる。豊かな消費社会における賢い買い物ガイドの役割を意識した Daves 時代には、「賢い買い物特集号」が生まれ、編集長による巻頭コラム「VOGUE's Eye View」にも「流行遅れにならないファッション」とか「新しいスーツ・ルックへの 10 通りの方法」などのハウツー的なテーマがしばしば取り上げられた。また、雑誌前半の特集部分を抜き刷りにしてファッション・トレンドを要約したものを「ストア・ガイド」として小売店向けに発行するなど、販売促進のアイデアにも優れていたという。

一方、1950 年代は極端な反共産主義による「赤狩り」がメディアを硬直さ

せた「マッカーシー時代」であり、ジャーナリズムの多くは政治や社会問題を避け、本来ハイ・ファッション誌である『VOGUE』は難しい問題についてはすべて沈黙していた。「あこのころ『VOGUE』は絵本だった。…『VOGUE』は女性を代議士だからといって取り上げたりしなかった。彼女が非の打ちどころのないスタイルや趣味を持っているからこそ、被写体にした…自分のスタイルを持った趣味のよい女性たちを紹介することこそが、『VOGUE』の存在意義だった」とMirabellaは述べている。こうした女性の1人として後にKennedy大統領夫人となるJacqueline Lee Bouvierが登場している。

## ● Diana Vreelandの1960年代

第二次世界大戦後に台頭したアメリカ主導の消費文化は、1960年代には世界規模での大衆消費社会の到来をもたらし、さまざまな新しい価値観を生み出すことになった。非西欧文化への関心、ポップ・カルチャーやサブ・カルチャーの台頭、ミニ・スカートに代表される身体意識の変革や性解放などなどは、『VOGUE』誌上でもたびたび取り上げられた。ドラッグも社会問題化していたが、こうした問題の背景にあるヴェトナム戦争については『VOGUE』ではほとんど触れられることがなかった。

こうした時代変革の推進者となったのは、戦後生まれのベビー・ブーマーたちだった。1960年代は「ヤング革命」の時代と言われるが、『VOGUE』では既成の体制や古い価値観に反抗する若者の動きを“youthquake”と名付けて何度も特集している。

この激動の1960年代の『VOGUE』を担ったのはDiana Vreeland (1906-89、編集長在任1963-71)である。幼少期をベル・エポックのパリで過ごし、社交界の中で独自の教養と美意識を身に付けたというVreelandは、白いレースのドレスに赤いバラを髪に1本挿して高級ホテルSt.Regisで踊っていたところを『Bazaar』編集長だったSnowに「発見」されてファッション界でのキャリアをスタートしたという伝説的人物である。

1960年代初頭、『VOGUE』を含めたCondé Nast出版の編集部門を管掌していたのは、前出のLiebermanだった。感性面に弱点があったと評されるDavesの後任として抜擢されたVreelandは、1962年に『VOGUE』に移籍し、翌年正式に編集長に就任した。「謹厳で取り澄ましたDavesはまさに50年代の編



1951年8月15日号に掲載されたJacqueline Lee Bouvierのシンプルなドレス姿の小さなポートレート写真。

彼女は、同年3月1日号では妹とともに正装したポートレートも掲載されていた。“Prix de Paris”という、1935年に創設されたアメリカの大学4年生を対象に『VOGUE』のスタッフとしての半年間のパリ派遣を賞品とした懸賞論文制度があり、第16回優勝者のJacquelineは、パリ留学経験やGeorgetown大学卒業というプロフィールとともに紹介されている。Jacquelineは新聞社に勤めることになり、晩年も編集者として働いた。



Diana Vreeland  
Diana Vreeland『ALLURE』  
(Doubleday, 1980)より



Liebermanのアート・ディレクション、Pennの写真による1950年4月1日号表紙(ファッションは、Larry Aldrich)(左)カラー写真表紙全盛時代にあって、モノクロ・ファッションをテーマにしたこの号のモノクロ写真表紙は大胆なインパクトがあった。

『VOGUE』1967年10月号表紙(右)  
モデルは時代のアイコンTwiggy。



VreelandのWoodstock  
『VOGUE』1969年12月号より



Vreelandがパリ・オートクチュールを評したページ  
Vreelandの原稿には必ずDVのサインが記された。『VOGUE』1968年9月15日号より。

集者だった。そしてDiana Vreelandは、社会のあらゆる壁が崩れた60年代の編集者だった」と、Mirabellaは述べている。

「Vreelandの『VOGUE』は大きく変動している世界を取り入れようとした。新しく『多様化した文化』と呼ばれるスタイルを『VOGUE』のために探っていた。セックスを取り入れ、ロックンロールを持ちこみ、当然の流れでドラッグも入ってきた。Vreelandが『VOGUE』を支配した最初の5年間は、若さと新しさが『VOGUE』のページで踊っていた。『VOGUE』はいきいきと弾むほどの活気があり、新鮮で初々しかった。創刊以来はじめてのことだった。」

Vreelandは最初のセレブ・ファッション・エディターであり、欧米の上流階級や文化人との華やかな交友関係がそのまま『VOGUE』に持ち込まれた。“Beautiful People”と名付けられたこうした人びとの代表はJacqueline Kennedyである。Kennedy夫妻は大統領選直後から華々しく巻頭で取り上げられ、大統領の死後もギリシアの船舶王Onassisと再婚したJacquelineやKennedy一族を取り上げている。インタビューや読み物でも、フランスの思想家Jean-Paul Sartre (1905-80)からジャズ・トランペット奏者のSatchmo (1900-71)まで、多彩な著名人が綺羅星のように誌面を飾った。

Vreelandはその鋭い感覚と強烈な個性で『VOGUE』の感性面を支配して新しい雑誌に作り上げた。1957年日本公開のAudrey Hepburn主演映画『Funny Face』（パリの恋人）に登場するファッション誌編集長は彼女をモデルにしたものだとされる。しかし、「ビューティフルでファンタスティックな夢の世界」に固執するVreelandの価値観が最大の問題であることが次第に露呈する。また、60代という年齢も要因の1つだったのである。「『VOGUE』にWoodstockを取り上げるとき、フランス印象派画家のÉdouard Manetの「草上の昼食」の複写とコンサート写真を並べて紹介した。たしかにヴィジュアル的にはとても魅力的だし、知性を感じさせて美しいけれども、ポイントを完全にはずしてしまっている」とMirabellaが指摘するように、Vreelandの『VOGUE』は結局若い雑誌にもなれないまま読者数を大きく減らすことになる。傍目には無駄としか映らない膨大な経費問題など、60年代末にはVreelandはLiebermanを含めた経営陣との軋轢が絶えなかったという。1971年に、不本意ながら『VOGUE』を去った後は、メトロポリタン美術館にコスチューム部門を創設しコンサルタントとして活躍し、芸術・文化としてのファッションの確立に尽力した。

## ● Grace Mirabellaと『VOGUE』の1970～80年代

さて、ここまでもたびたび登場したGrace Mirabella(1929-、編集長在任1971-88)である。イタリア移民の両親のもと、ニュージャージー州で生まれ、Skidmore College卒業後、ニューヨークのデパートでアシスタントを経験し、1952年、Condé Nast出版に入社、『VOGUE』の編集に加わる。1963年に



1970年代初めの Grace Mirabella  
『In and Out of VOGUE』より。



Vreeland が編集長に就任すると、そのアシスタントとして編集実務を担った。Vreeland が解任されると、後継の編集長に昇格し、『VOGUE』を、現実生活に即したリアル・ライフなファッション雑誌へと方向転換した。発行部数が飛躍的に伸びたことなど、Mirabella の『VOGUE』時代については、先にも挙げた『In and Out of VOGUE』に読むことができる。

Mirabella の『VOGUE』は、Vreeland の “Beautiful People” に替わって、働く女性のライフスタイルにスポットライトを当て、ファッションにも合理性や着易さを求め、ハイ・カルチャーに替わって健康問題の特集した。女性の「老化」問題に取り組もうとし、タバコの広告掲載を嫌った嫌煙家の Mirabella は、次第に経営陣との軋轢が深まって、1988年に解任されるが、自身の解任をテレビ番組で知ったという。『VOGUE』を離れた後、自身の名を冠した大人の女性向けライフスタイル誌『Mirabella』を「メディア王」Rupert Murdoch(1931-)の News Corporation から創刊するが、この雑誌は2000年に休刊となっている。

Mirabella の後任となったのは、Anna Wintour(1949-、編集長在職 1988-)だった。

### ●女性編集長と男性経営者たち

『VOGUE』の編集長の変遷、すなわち交代劇は実に興味深い。Daves や Mirabella のようなリアリズム志向あるいは実務派ともいうべき編集者と、Vreeland のようなファンタジーを好む感覚人間とが、ほぼ交互に起用されていることである。どちらかに振れすぎて、その結果が売上げ低下という形で厳しい評価が下されると、ドラスティックに首がすげ替わる。そして、女性編集長の上司は、編集部門ディレクターの Liberman であり、発行人の Iva Patcevitich や Samuel Irving Newhouse 父子、Robert A. Shortway ら男性たちであった。雑誌を作るスタッフの大半が女性であるにもかかわらず、女性取締役が1人もいないことを、Mirabella は嘆いていた。

現在の発行人欄には Susan D. Plagemann という女性名が記されている。

(文化学園大学特任教授／ファッション文化論)

着やすさをテーマとした Mirabella  
時代のファッション・ページ  
『VOGUE』1976年2月号より。



『Mirabella』1997年1月号